

古英語から現代英語に至る ly 副詞の 歴史的発達について

田 畑 圭 介

On the Historical Development of ‘-ly’ adverbs: From Old English to Modern English

Keisuke TABATA

要 旨

ly 副詞の歴史的発達を古英語から現代英語に至るまで概観し、ly 副詞が古英語の時代には修飾する表現の直前で用いられる特性を持っていたことを例証する。そして現代英語には見られないこうした特性が中英語の時代に衰退し、この時代に現代英語の副詞の統語分布が確立したことを論証する。単純形副詞の近代英語での衰退、分裂文との共起性が ly 副詞の変遷を把握する上で重要な鍵となることも合わせて論じる。古英語での *lice* 副詞の繁栄と近代英語の単純形副詞の衰退が ly 副詞の歴史的発達の脈流となる。

キーワード：副詞、修飾、史的統語論、史的形態論

1. はじめに

現代英語において最も多彩で掴みづらい品詞は副詞である。Leech (2015:151) が *Adverbs and adverbials have been virtually ignored by theoretical grammarians.* と述べるように、副詞表現の理論的な分析は常に困難が伴う。それでも副詞を細部に通時的に区分していくことで用法に関する一般的特性がある程度見えてくるように思われる。本稿では、副詞の種類と副詞と分裂文の古

来の結びつき、また現代英語の副詞の基本接尾辞となっている *ly* の歴史的起源について、歴史的発達の過程をたどりながら考察を行う。そして歴史的過程において *ly* 副詞の起源となる *lice* 副詞が、現代英語と異なり修飾する要素の直前に用いる傾向があることを例証する。続いて中英語の副詞の分布を概観しながら、現代英語の副詞の統語分布の礎は中英語期にできあがったことを論証する。最後に並行的に発達してきた単純形副詞 (*flat adverb*) が衰退していき、*ly* 副詞が近代英語期以降に確立した歴史的背景について言及する。

2. *adverb* について

副詞 *adverb* は、ラテン語の *adverbium* (接頭辞 *ad* (〜に付加され、〜を修飾する) + 語幹 *verbum* (語)) から生まれた語である。古フランス語の *averbe*、中英語の *adverbe* を経て、1395年の *Wycliffite Bible* での *adverb* が初出となる (寺澤1997)。*verbum* の意味はギリシャ語の *rhêma* のなぞりとして生まれ、動詞が語の中で最重要語 (*the word of words*) であったことから、「語」であった意味がのちに「動詞」の意味に変化している。したがって本来 *adverb* は「語」を修飾するものという意味を持ち、それが *adverb* の原義となる。実際、副詞は次のように動詞、形容詞、文、名詞句、前置詞句を修飾することが可能である (岡田1985:5)。

- (1) a. *She sings well.*
b. *Your work is very good.*
c. *Probably*, John hit the ball.
d. We based our argument on *precisely* those grounds.
e. *Much* to my surprise, the box was empty.

本稿ではまず副詞の基本機能とその形態について概観する。岡田 (1985)、Declerck (1991) の分析を中心としながら、副詞の種類を鳥瞰していく。次節での説明に用いる用例で出典の記載のないものは岡田、Declerck の著からの引

用となる。

3. 副詞の種類

岡田（1985）は副詞を付接詞（adjunct）、離接詞（disjunct）、合接詞（conjunct）の3つに分類し、Declerck（1991）は adjunct、disjunct、conjunct、subjunct（下接詞）の4つに分類している。岡田は Greenbaum（1969）と Quirk *et al.*（1972）を参照して副詞を3つに分類しており、Declerck は Quirk *et al.*（1985）を参照し、Quirk らが新たに追加した下接詞にも言及している。adjunct の和訳についてはこれまで付接詞と付加詞、conjunct は合接詞と接合詞が用いられてきている。本稿では adjunct には付加詞、conjunct には接合詞の和訳を用いることにする。

付加詞（adjunct）は場所、時、様態などを表し、文の中核的要素として文構造に組み込まれる。分裂文（cleft sentence）の焦点になりうることが付加詞の統語的特徴の一つである。

- (2) a. It was *to the church* that he walked.
b. Was it *outside* that they were standing?
c. It was *with great pride* that he showed the trophy to the photographers.
d. It was {*yesterday/in the garden/with cheese/by putting them in a coffee pot/so very slowly*} that she cooked the eggs.

付加詞の中でも、単純形副詞は分裂文の焦点にはなれないことに注意しておきたい。単純形副詞が複合的な表現になった際には（3e,f）のように焦点になりうる。

- (3) a. It was slowly that he drove the car into the garage.
b. *It was slow that he drove the car into the garage.
c. It was loudly that they argued.
d. *It was loud that they argued.

e. It was loud and clear that he spoke.

f. It was extremely loud that they argued. (安井・秋山・中村1976:8)

古英語の時代にも分裂文内の付加詞の用法はすでに見られ、付加詞と分裂文の共起特性はこの頃すでに成立している。

(4) Ðæt wæs on þone Monandæg æfter sca Marian mæsse þ Godwine mid his scipum to Suðgeweorce becom.

(=It was the Monday after the Naitivity of the Virgin that Godwine arrived at Southwark with his ships.) (ChronC 182, 9(1052))

離接詞 (disjunct) は文副詞で、自分の発話の形式について話者がコメントを付け加えるタイプのもの (frankly、roughly など) と自分の発話の内容について話者がコメントを付け加えるタイプのもの (amazingly、annoyingly など) がある。

(5) a. Briefly, you'd better not come back here. (発話の形式)

b. Fortunately, no one was injured. (発話の内容)

離接詞は分裂文の焦点になることはできないが、離接詞の中には形容詞形で分裂文の焦点になりうるものがある。

(6) a. *It's incredibly/unbelievably that he failed the exam.

b. It's incredible/unbelievable that he failed the exam.

(Corpus of Contemporary American English (COCA) とインフォーマント調査に基づく。)

接合詞 (conjunct) は伝統文法でいう接続副詞に相当し、前述のこととのつながりを示す。

- (7) a. Jenny refused to speak to Bess. Jeremy, *however*, was friendly to her.
b. They haven't finished counting the votes yet. It looks bad for the Conservatives, *though*.
c. If you won't stop driving so recklessly, *then* you can stop the car and let me out.

接合詞も分裂文の焦点になることはできない。

- (8) *It is *however* that they came too late.

Quirk *et al.* (1985) が言及した下接詞 (subjunct) は、主語と動詞、また節全体に対し従属的な役割を担う要素である。

- (9) a. *Even* Brian was not happy about it.
b. *Linguistically*, orthography is not very important.
c. John was *deeply* disappointed.

下接詞は分裂文の焦点になるものとならないものがあり、焦点になりうるものは付加詞に包含される位置づけとなる。

- (10) a. * It was *even* that John was not happy about it.
b. It is *psychologically* that they came too late.

下接詞は (11) のように分裂文と共に慣用的な表現を形成したり、古英語期から分裂文と共起したりすることから、副詞と分裂文は元来強い結びつきをもった関係にあると結論づけることができる。

(11) *It was not that John pretested; it was merely that he was rude.*

(ジョンは抗議したというのではなくて、ただ単に無作法だったただけなのだ。)

(小西1989:1115)

(12) a. *It is often that they visit me.*

b. *It is not often that A.J. is in that much of a hurry.*

(A.J. がそんなに急いでいるなんてめったにないことよ)

(小西1989:1271)

4. 古英語の副詞の生起位置

宇佐美 (1992:179) は「現代英語の場合と同様、古英語でも、文・節・句中での副詞部の位置は多様なので、一般的に論ずるのは困難である」と述べている。副詞の生起位置は多様で一般化は困難であることは確かであるが、本節では副詞を細分することである程度の生起位置の規則性が浮かび上がることを論証する。本節の古英語のデータは宇佐美 (1992) からの引用となる。

現代英語では接合詞 *then* は通例文頭または文尾で用いられる。動詞と副詞句の間に介在することはないが、古英語ではそうした分布が可能で、接合詞 *þā* (*then*) は (13) のように分布する。

(13) *hē lihte þā mid lēodan*

‘then he alighted among the people’

この例を見ると古英語では現代英語よりも副詞が自由に生起可能であったことが窺える。古英語期の副詞は修飾する語・句・節・文の直前に置かれたり、また被修飾語の後に置かれたりすることもあった (宇佐美 1992:178-180)。

(14) *swīðe hrīmige bearwas* (形容詞 *hrīmige* を前置修飾)

‘*very frosty woods*’

(15) *ðe Ælfr ēd cyning snoterlice āwende of Ledene* (動詞 *āwende* を前置修飾)

‘*which King Alfred wisely translated from Latin*’

(16) *swīðe raðe* (副詞 *raðe* を前置修飾)

‘*very soon*’

(17) *nā þurh gebylde micelre lāre, ac forþan þe ...*

(句 *þurh gebylde micelre lāre* を前置修飾)

‘*not at all through confidence of great learning, but because ...*’

(18) *witodlice, be hyra wæstmum gē hī oncnāwað.*

(文 *be hyra wæstmum gē hī oncnāwað* を前置修飾)

‘*Truly, by their fruits, you will distinguish them.*’

(19) *man geald ærest gafol* (動詞句 *man geald* を後置修飾)

‘*tributree should be paid for the first time*’

(20) *stōd on stæðe, stīðlice clypode, wordum mælde*

(動詞 *stōd* を後置修飾、動詞 *clypode* を前置修飾、動詞 *mælde* を前置修飾)

‘*stood on the shore, called out sternly, spoke with words*’

後置修飾を行う副詞は複合的な要素であったり、多音節という特徴を持つ。

(21) *hē gelufod wæs fram ðām mædene*

‘*he was loved by the maiden*’

前述の後置修飾の副詞は現代英語でも後置修飾として用いられるものである。注目すべきは古英語では現代英語には見られない前置修飾の用法が多数見られる点である。例えば (20) の *stīðlice* (*sternly*) の副詞は現代英語では後置修飾が普通である。それに反して古英語期には *stīðlice* (*sternly*) が前置修飾で用いられている。市河・松浪 (2013) が掲載する10種類の古英語テキストの中で、*-ly* 起源の副詞 (*-lice*) はいずれも前置修飾となっており、古英語の *-ly* 起源の副詞は前置修飾が基本となることが窺い知れる。

(22) *and æðellīce gefexode* (動詞 *gefexode* を前置修飾)

‘... and *excellently* haird’

(23) *stānas mōton fæste gehabban* (動詞 *gehabban* を前置修飾)

‘the stones are able to hold *firmlly* against my strengh’

(24) ... *þæt hēo gearolīce ongieten hæfde þæt ...* (動詞 *ongieten* を前置修飾)

‘... that she had clearly realized that ...’

(25) *rihtlice hī sind Angle gehātene, ...* (文全体を前置修飾)

‘*rightly* they are called Angles, ...’

(26) *Þā wurdon ēac swīðe unēðelīce āseten* (動詞 *āseten* を前置修飾)

‘they were aground *in a very invonvenient way*’

(27) *se hearpere wæs swīðe unġefræglīce good* (形容詞 *good* を前置修飾)

‘the harper was *inconceivably* good’

(28) *And Tantalus se cyning, ðe on ðisse worulde unġemetlice ġīfre wæs, ...*

(形容詞 *ġīfre* を前置修飾)

‘And King Tantalus, who was *excessively* greedy in this world, ...’

市河・松浪（2013:84）では文修飾副詞 *sōþlice* が 5 回登場するが、1 例のみ文頭でなく文中で用いられている。これは直後の *fēollon* を強制的に修飾していると読み取ることができる。

(29) **Sōþlice** ūt ēode se sāwere his sǣd tō sāwenne. And þā þā hē sēow, sumu hīe fēollon wip weg, and fuglas cōmon and æton þā. **Sōþlice** sumu fēollon on stānihte, þær hit næfde micle eorþan, and hrædlīce ūp sprungon, for þām þe hīe næfdon þære eorþan dēopan; **sōþlice**, ūp sprungenre sunnan, hīe ādrūgodon and forscruncon, for þām þe hīe næfdon wyrtruman. **Sōþlice** sumu fēollon on þornas, and þā þornas wēoxon, and forþrysmdon þā. Sumu **sōþlice** fēollon on gōde eorþan, and sealdon wāestm, sum hundfealdne, sum siextigfealdne, sum þrītigfealdne.

(**Truly** the sower went out to sow his seeds. And while he was sowing, some of them fell along the way, and birds came and ate them. **Truly** some fell on stony ground where it had not much earth, and quickly sprang up, because they had not any deep earth; **truly**, the sun (being) risen up, they dried up and shrank up, because they had not roots. **Truly** some fell on thorns, and the thorns grew, and choked them. Some **truly** fell on good ground, and gave fruit, some hundredfold, some sixtyfold, (and) some thirtyfold.)

以上のデータから *ly* 副詞の起源となる *lice* 副詞は古英語期には修飾する表現の直前で用いる副詞であったと帰結できる。

Helsinki Corpus の OEII (850-950) を検索すると *lice* 語尾で終わる語が 412 例見つかるが、そのうち文末で用いられている副詞は 4 例のみである。

(30) a. <R 3.104.32> & in +t+are cirican nor+dportice w+as bebyrged ged+aftlice.

- b. <R 34.87.24> & +teah ne bio+d eallunga gelice.
- c. <R 67.1.2> eofor+trote, cropleac, ofgeot gelice.
- d. <R 34.1.3> wyl on w+atre & be+te mid & rece +ta sinwe geornlice.

(30a) の gedæftlice (correctly) は wæs bebyrged (was buried) の受身文の文末で用いられている。これは当該副詞が他音節であることと関係することが推察できる。(30d) の geornlice(eagerly) も同様である。(30b) と (30c) の gelice(alike) はもともと文末で用いる特性を持つ副詞であると帰結できる。lice 副詞は元来修飾表現の直前で用いられる特性を持っているが、他音節となる場合には音韻的な理由で文末に置かれることもある副詞だと結論付けることができる。

5. ly 副詞の通時的派生

本節では現代副詞の大部分を占めている ly 副詞の歴史的発達を詳細に見ていく¹⁾。現代英語の ly 副詞は基本的に古英語の (31) – (34) のいずれかの派生を経て形成されている。それぞれは他の品詞からの転用あるいは派生によるものとなる。形容詞の語幹につく接尾辞 -e は所格 (locative) を起源としている。

(31) 形容詞に -e を添えてつくられた副詞

- dēope ‘deelpy’ < dēop ‘deep’
- hearde ‘firmly’ < heard ‘firm, hard’
- wide ‘widely’ < wīd ‘wide’
- lange ‘long’ < lang ‘long’
- rihte ‘rightly’ < riht ‘right’ など。

(32) 形容詞がもともと -e で終わっているため、形容詞と同形となった副詞

- blīpe ‘joyfully’ < blīpe ‘joyful’

(33) 現代英語の -ly のもととなった接尾辞 -lice がついて出来上がった副詞

bealdlice ‘boldly’ < beald

blīþelīce ‘gladly’ < blīþe ‘joyful’

openlice ‘openly’ < open ‘open’

(34) -lic で終わる形容詞に副詞派生接辞 e が付加され、-lice の語尾をもつ副詞。形容詞派生接辞 -lic は現代英語の like に相当する。ただし (34b,c) は形容詞に -e が付き副詞になった後で -e が落ちて -lice が付いた可能性も残される。

a. frēondlice ‘kindly’ < frēondlic ‘kindly’

b. heardlice ‘harshly’ < heardlic ‘harsh’

hearde (adv) < heard (adj)

c. sōðlice ‘truly’ < sōðlic ‘true’

< sōðe < sōð

古英語期、-lice の副詞は、-e の副詞よりも圧倒的に多く存在していた。現在の副詞の最も典型的な形となっている ly 副詞は古英語期に副詞の典型的な語尾として -lice が多用されていたことに端を発している。

副詞の中には次のように語基に -lice を付けて副詞となったものなのか、形容詞に接尾辞 -e を付けて派生されたものなのか、生成過程が不明なものもある。

(35) wrāðlice ‘furiously’ < wrāð ‘furious’

< wrāðlic ‘furious’

(36) unārīamedlice ‘innumerably’ < unārīmed ‘innumerable’

< unārīmedlic ‘innumerable’

いずれにしても現在の ly 副詞の生産性は古英語期の lice 副詞の生産性が起

源となっていることに注意しておきたい。

6. 古英語期のその他の副詞

古英語期の高頻度の副詞には -(līc)e と異なる語形を持つものもあり、それらの副詞は場所・時・方向を示すものであった。

(37) ðær ‘there’, hēr ‘here’, hwær ‘where’, in(n) ‘in’, ūte ‘out’, ūp ‘up’, hwanne ‘when’, þonne ‘thebn’, hider ‘hither’, þider ‘thither’, whæder ‘whither’, forð ‘forth’, feor(r) ‘far’, nēah ‘near’ (宇佐美1992:61)

これらは ly の語尾をとらない副詞群の祖先となる。

古英語期には -(līc)e 以外にも、-inga、-unga、-es、-a、-um の接尾辞をもつ副詞も存在していた。

- (38) a. brādlinga ‘flatly’, dearnunga [— inga] ‘secretly’
b. ealles ‘entirely’, elles ‘otherwise’, hāmweardes ‘homewards’, nihtes ‘by night’,
nēdes ‘of necessity’
c. sōna ‘soon’, ġeāra ‘formerly’, tela ‘well’, þriwa ‘twice’
d. hwīlum ‘sometimes’, furðum ‘even’, unwearnum ‘irresistibly’

7. 中英語期の副詞を作る接尾辞

中英語の時代に副詞を作った接辞には次のものがある。

- (39) a. -e 語末が子音で終わる形容詞から様態副詞を派生する。
後の近代英語の時代には -e は消失する。
b. -ing 古英語の -inga と -ungano に由来する派生接辞。
- brighte, brode ‘broadly’, clere ‘clearly’
alling ‘wholly’, grovelling, darkling

c. -ly 古英語の *lice* に由来する派生接辞。14世紀に一般的となった。

ugly のように現代英語では副詞用法がなくなり、形容詞用法のみとなった語もある。

kindly, nobly, ugly, lively, ably, firstly, blessedly

d. -wise 古英語の名詞 *wīse* (*manner*) に由来する派生接尾辞。

crosswise, cornerwise, likewise

-ly の接尾辞には、副詞を派生する接尾辞とは別に、形容詞を派生する接尾辞 -ly や -li があった。13世紀に North と East & West Midlands で用いられ始め、15世紀には全方言で一般化されている。(中尾1972:414)

(40) *goodly, manly, kindly, homely, yearly, daily, weekly, lowly, sickly*

8. 中英語期の語形変化

古英語期に語末の無強勢の音節に現れた *a o u* が、14世紀にはすべて *e[ə]* に変化し、単純化 (*simplification*) されることになる。古英語期には形容詞の語幹に所格起源の -e をつけて副詞を作る派生が見られていたが、この派生過程は引き続き中英語期にも見られる。しかしながら副詞派生接辞 -e は *[e] > [ə]* の過程を経て15世紀に消失し、つづり上も脱落して形容詞と同形の単純形副詞 (*flat adverb*) が誕生する。1節で見たように分裂文の焦点になりうる副詞であったものが、単純形副詞となることで分裂文の焦点になれなくなる歴史的過程があり、このことは単純形副詞が *ly* 副詞と形態的には類似しているが、完全に独立した副詞群として発達していくことを暗示している。

単純形副詞が生まれたことの類推によりラテン系の形容詞がそのまま副詞として用いられるようになった。16世紀には他の形容詞も同形で副詞として用いられるようになっていく。現在の単純形副詞が多く見られるきっかけとなった歴史的語形変化といえる。

次の副詞は古英語期に形容詞に *e* がついて形成されたものだが、中英語期に

なると e が脱落し、形容詞と副詞が同形となる。

(41)	古英語	中英語	近代英語	
a.	dēop	dēop-e	dēop	deep
b.	fæst	fæst-e	fæst	fast
c.	slaw	slāw-e	slāw	slow
d.	heard	heard-e	heard	hard

-e をつけて副詞を作る派生は数的にはそれほど多くない。中英語期の副詞の基本派生接辞として見なされるのは -lice である。古英語では -e をつけて副詞を派生した形容詞も中英語では -lice を付けて改めて副詞を作るようになった。

(42)	古英語	中英語	近代英語
a.	dēop	dēoplice	deeply
b.	slāw	slāwlice	slowly

その結果、それまで -e の付加により副詞となっていた (41) と -lice の付加により誕生した (42) が同義として共存するようになり、16世紀以降副詞と単純形副詞の二重語 (doublet) が形成されることになる。

次に示すものも -lice の付加による副詞の二重語の一例である。

(43)	古英語	中英語	近代英語
a.	gecȳnde (名詞)	gecȳndlic (形容詞)	kindly (形容詞)
b.	gecȳnde (形容詞)	gecȳndlice (副詞)	kindly (副詞)
c.	clāne (形容詞)	clānlic (形容詞)	cleanly (形容詞)
d.	clāne (形容詞)	clānlice (副詞)	cleanly (副詞)

9. 中英語期の *ly* 副詞の位置

中英語の *ly* 副詞は英詩においてはその多くが文末で用いられている。市河・松浪（2013:171-175）に掲載されている *The Bruce* の英詩では (44) のように *ly* 副詞は10例中 8 例が文末で用いており、*ly* 副詞の多くは動詞の後置修飾表現となっている。また散文においても (45) のように動詞句を後置修飾している。市河・松浪の他の中英語詩も同様で、中英語の *ly* 副詞は文末使用が優勢で、動詞への後置修飾が基本であると帰結できる。

(44) a. That tōward hym cōm *spēdelȳ* ‘speedily’,

b. Wār his fayis all *ūtrely* ‘entirely’,

c. And had vachit sō *besaly* ‘eagerly’,

d. The kying thāme met full *hardely* ‘boldly’,

e. And smāt the first sō *rigorōūslȳ* ‘rigorously’,

f. Richt bē the nek full *felonly* ‘cruelly’,

g. Bōt the kyng followit *spēdelȳ* ‘speedily’,

h. The kyng assālit sā *suddanly* ‘suddenly’,

i. And hē all *hālȳ* ‘fully’ can thaim tell, (前置修飾)

j. That sō *smertly* ‘quickly’ has slayn thir thrē (前置修飾)

(45) a. ac hē tōdēld it and scattered *sotlice* ‘foolishly’. (Perterborough chronicle)

b. spec se swīðe *swōteliche* ‘sweetly’ and ... (Ancrene Wisse)

c. and ich hit wülle *heorteliche* ‘heartily’ forte ofgān þīn heorte. (Ancrene Wisse)

d. settand thaire thoghte *unryghtwȳsely* ‘unrightfully’ on thaym

(Richard Rolle of Hampole)

e. And pleyde wiþ hem *perilōūslȳch* ‘dangerously’ and ... (Piers the Plowman)

これらは中英語期の特徴というだけでなく、現代英語の副詞の用法の原型でもある。現代英語に見られる分離不定詞の用法も (46) のように見られ、中英

語期は副詞の現代用法が確立した時代として認識できる。

(46) Tō *clanly* clōs (to *radiantly* enclose) in golde sō clēre (The Pearl)

10. ly 副詞の確立

15世紀以降になると ly 副詞が広範的に使われるようになるが、ly 副詞は動詞を頻繁に修飾するのに対し、単純形副詞は形容詞、副詞を修飾する語として相補的に使われるようになった。

(47) a. I have been *broad* awake two hours and more. (Titus Andronicus II. ii. 17)

b. I am *full* sorry that he approves the common liar. (Antony and Cleopatra I. i. 60)

また本来は形容詞であったものが、同形のまま副詞として用いられるようになる（荒木・宇賀治 1984:498）。括弧内は副詞用法の OED における初例年を示している。

(48) burning (1475)	grievous (1596)	mighty (a 1300)
dreadful (1682)	horrible (c 1400)	monstrous (1590)
exceeding (1535)	indifferent (1583)	passing (1387)
excellent (143)	infinite (1526)	real (1658)
excessive (1569)	intolerable (1592)	tolerable (1673)
extreme (1593)	marvelous (c 1330)	wondrous (a 1557)

本来形容詞であったものが、同形で副詞として一般に用いられる時代が、18世紀中ごろまで続くことになるが、18世紀末ごろには規範文法（prescriptive grammar）が確立される。規範文法は ly 副詞こそが正しい副詞であり、単純形副詞は形容詞にすぎないとされ、単純形副詞はその後口語表現として生きながらえるが、多くの単純形副詞は衰退の一途をたどることになる。荒木・宇賀治

(1984:494) は Lowth (1762) の次の言葉を引用している。

(49) Adjectives are sometimes employed as Adverbs: improperly, and not agreeable to the Genius of the English Language.

規範文法による副詞の厳格化により、副詞は -ly の語尾をもつ語という定式化が確立された。ly 副詞が副詞の大部分を占める現代英語のはじまりである。

11. おわりに

本稿では現代英語の副詞の中核をなす ly 副詞の歴史的発達を、古英語、中英語、近代英語の時代区分にもとづき概観した。ly 副詞とともに平行して発達してきた単純形副詞は近代英語期に衰退することとなるが、両副詞の独立性は分裂文との共起性から明白となり、それぞれが相補的に用いられるものであることを示唆している。古英語では現代英語には見られない ly 副詞の修飾部直前配置の用法が一般的であったが、中英語での語順の確立とともに減少していく。そして中英語の時代に現代英語の統語分布が確立することになる。近代英語の時代に入ると単純形副詞が衰退し、現代英語の ly 副詞が定式化されることになる。現代英語で現存する単純形副詞は Swan (2005) が言及するように ly 副詞とは独立した意味用法として適宜使用されている。一部の単純形副詞は ly 副詞との共存を模索する時代を乗り越え、現在の ly 副詞との棲み分けの時代に行きついたことになる。

注

1) 現代の多くの副詞は接尾辞として -ly を持つが、頻度の高い副詞の中には -ly をとらないものもある。

(i) yesterday, today, tomorrow, then, here, there, up, down, quite, very, fast, often, not, perhaps, maybe

これらは5節で示されるように古英語期にすでに確立していた副詞群である。

また現代英語で *-ly* でなく、別の接尾辞をとる副詞もある。*-wise* は様態や領域を表す副詞を作り、名詞に付加される。*wise* は古英語の *wīse* (*manner*) に由来する。

(ii) *clockwise*, *weather-wise*, *lengthwise*, *edgewise*, *crabwise*, *marketwise*, *sidewise*, *widthwise*

-ward(s) は方向を表す副詞を作り、名詞、形容詞、副詞に付加される。

(iii) *bedward(s)*, *backward(s)*, *downward(s)*, *upward(s)*, *homeward(s)*, *eastward(s)*, *westward(s)*, *southward(s)*, *northward(s)*, *heavenward(s)*, *inward(s)*, *outward(s)*, *onward(s)*, *sideward(s)*

現代英語では使用がみられなくなったが、13世紀には *awayward*、15世紀には *cityward* といった語が生まれている。また現代英語で多用される *awkward* も同様の派生から生まれているが、誕生した14世紀には「逆向きで」の意味で用いられていた。本来は副詞であったが、現在は形容詞としてのみ用いられる。古英語期には *-ward(s)* の祖先となる接尾辞 *-weard(s)* があり、同じく方向を表す接尾辞であったが、*-weard* の接尾辞を持つ語は古英語では副詞でなく、形容詞であった。

(iv) *æfterweard* ‘following’, *ēasteweard* ‘eastward’, *forþweard* ‘inclined forward’, *hāmweard* ‘homeward’, *norþweard* ‘northward’, *ufeweard* ‘upward, upper’

(宇佐美1992:230)

参考文献

- Davies, M. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English: 520 million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Greenbaum, S. (1969). *Studies in English adverbial usage*. London: Longman.
- Leech, G. (2015). Descriptive Grammar. In Biber, D. and Reppen, R. (Eds.), *The Cambridge Handbook of English Corpus Linguistics*. (pp. 146-160). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lowth, R. (1762). *A Short Introduction to English Grammar*. 英語文献翻刻シリーズ第13巻(郡司利男解説). (1968), pp.5-113. 東京：南雲堂.
- Quirk, R., Greenbaum, S. Leech, G. and Svartvik, J. (1972). *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S. Leech, G. and Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. (2005). *Practical English Usage Third Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- The Helsinki Corpus of English Text: Diachronic Part. (1999). ICAME Collection of English Language Corpora Second Edition.
- 荒木一雄・宇賀治正朋. (1984). 『英語史Ⅲ A』 東京：大修館書店.
- 市河三喜・松浪有. (1986). 『古英語・中英語初歩』 東京：研究社.
- 宇佐美邦雄. (1992). 『学習院大学研究叢書 21 古英語文法研究』 東京：学習院大学.
- 岡田伸夫. (1985). 『副詞と挿入文』 東京：大修館書店.
- 小西友七 (編). (1989). 『英語基本形容詞・副詞辞典』 東京：研究社出版.
- 寺澤芳雄 (編集主幹). (1997). 『英語語源辞典』 東京：研究社.
- 中尾俊夫. (1972). 『英語史Ⅱ』 東京：大修館書店.
- 安井稔・秋山怜・中村捷. (1976). 『形容詞』 東京：研究社.

On the Historical Development of ‘-ly’ adverbs: From Old English to Modern English

Keisuke TABATA

ABSTRACT

This paper deals with the history of English -ly adverbs, with special emphasis on their syntactic status as premodifiers in the Old English period. It will be shown that their predominant premodifier properties not found in Modern English declined in the Middle English period, and the recent properties of their free placement were established in the Middle English period. Data demonstrate that the decline of flat adverbs in Early Modern English and the co-occurrence of -ly adverbs with cleft sentences are important keys to grasping the historical transition of -ly adverbs until today. In addition, the growth of *līce* adverbs and the decline of flat adverbs are shown to be watersheds in the history of -ly adverbs.

KEY WORDS

adverbs, modification, historical syntax, historical morphology